

園番号 621

## 令和2年度 奈良市立鳥見幼稚園 研究実践概要

園長名 林 三代

全園児数 30名

### 1. 研究主題

「なかまと共にいきいきと活動する中で、たくましい心と体を育む」

### 2. 研究年度

2年度

### 3. 研究主題設定理由

子どもが自ら考え主体的に活動する姿を、いきいきと活動する姿と捉え、その積み重ねが、たくましい心と体を育むと捉えた。子どもが主体的に活動するためには、子どもの発達の時期を見極めることで、必要な保育内容や環境構成等が行えると考え、研究を進めることにした。

### 4. 具体的な研究内容

#### ①研究のねらい

- ・意欲的または主体的に活動する姿について、その要因を探ることで、その時期の子ども達の発達の姿を明らかにする。

#### ②研究の重点

- ・研究主題について研修を行い、教員相互の共通理解を深め研究を深める。
- ・幼稚園教育要領及び奈良市立こども園カリキュラム等を活用するとともに保育記録を工夫し、幼児の発達の過程や時期を見極める力量を身につける。
- ・コミュニケーション力の向上や自尊心の高まりを目指し、地域の方などとの交流を計画する。

#### ③活動の方法

—ねらい \_\_\_\_\_—子どもが考えたり主体的に活動したりする姿

—主体的な姿につながる要因

#### 【事例1】「どんなふうになれるかな」 4歳児 7月

○トイを使って自分なりに考えたり、工夫したりして遊ぶ事を楽しむ。

○遊ぶ中で水の気持ちよさや不思議さに気づいたりしながら遊ぶ。

砂場で、土管にトイを斜めに立てかけて置いておく。A・B児が「水を流して遊ぶわ」とバケツでトイに水を流す。数回繰り返し遊んでいると、トイに水が勢よく流れ、トイが倒れた。保育者が「トイが倒れてしまったけど、どうする？」とA児に問いかける。A児「もうちょっと、長くしたらどうかな？」と保育者に話し、再度トイを土管に立てかける。また、もう一つ土管と長いトイを保育者と運び、新たにコースを作る。先程立てかけたトイにほぼ横一直線につながるように長いトイを繋げ土管の上に置く。A児・B児がペットボトルやバケツに水を入れ、新しいコースに繰り返し水

を流す。「流れたな」「うん」と嬉しそうに話す。A児「今度はもうちょっと高くしたいな」と話し、ボウルを土管の上に裏返して置き、高くしそこにトイを斜めに立てかける。A児「いくで」とバケツで水を流す。数回流しているうちに、横一直線に置いたトイに水が溜まり、反対方向にも水が流れ出す、保育者「あれ？さっきと違うよ」とA児や他児に聞こえるように声をかける、興味を持ったC児が様子を見に来る。「あっちからだけじゃなくて、こっちからも流れているで」とA児や保育者に伝える。A児「本当だ」と驚く。C児「こうしたら、ここにみずが溜まるで」とトイの先にバケツを置く。その後も、トイの繋ぎ目からあふれ出す水をバケツで受け止めたり、流す水の量を増やしたり、さらにトイを繋げて遊ぶ姿が見られた。

(評価・反省)

- ・土管にトイを立てかけておいたことで、トイに水を流して遊び始める姿が見られた。
- ・A児と保育者でトイに水を流して遊んでいたが、保育者が他児に聞こえるように声かけしたことで、他児が関わって遊ぶ姿が時々見られた。
- ・子どもが主体的に遊べるように声をかけたり、思いが出るまで待ったりすることも大切にしていきたい。

#### 【事例2】「料理をしよう」 4歳児 12月

○遊びに使いたい自然物や用具を選び、取り入れて遊ぶ

○友達や保育者と親しみを持って関わる中で思いを伝えたり、話したりすることを楽しむ。

砂場の近くにどんぐり、ジュズダマ、松ぼっくり、落ち葉等の自然物を種類ごとに分けて置いておく。A児が鍋にどんぐりを入れて、お玉で混ぜている。隣でフライパンにジュズダマを入れて、しゃもじで混ぜている。保育者「お料理、おいしそうだね」「できあがったら、食べたいな」と声をかける。A児「これは、お味噌汁」B児「これは、ご飯やで」と嬉しそうに話す。保育者がA児B児の遊んでいる側に、机や大きな四角い積み木を置いておく。A児とB児は机の上に作った料理を並べたり、大きな四角の積み木の上に鍋やフライパンを置いたりして、料理を作っていた。そこへC児とD児が様子を見にやって来る。G児「焼く網があるといいな」D児「いいね」C児「見てくる」と網を探しに行く。網を見つけ、C児とD児が机の上に網を乗せる。C児「この上で焼いたらいいよな」D児「うん」と早速網の上に鍋やフライパンを置き料理を作り始めた。C児「火もいるね」D児「本当だね」C児「どんなにしようかな」と少しの間考えている。保育者「火にできそうな何かいい方法はないかな」と問いかける。C児「あっちに使いそうなものがあるか見に行こう」D児「うん」と倉庫に走って探しに行く。D児「これ、火に使いたい」とオレンジ色のプラスチックの円柱を持って来る。保育者「面白いもの見つけてきたね。これを火にするんだね」と声をかける。D児「これ(円柱)をこうやって置くと火みたいになるで」と先程料理をしていた網の上に円柱を乗せ、その上に鍋を置く。C児「本当の焼くところみたいやな」と笑顔で話している。C児とD児は再び、料理を始める。C児「あったかくなってきたで」D児「もうすぐ焼ける」と話しながら遊ぶ。

(評価・反省)

- ・自然物を遊びに取り入れたことで、様々な料理に見立てたり、工夫して遊ぶ姿が見られた。
- ・以前に遊んだ経験を思い出したり、遊びに使いそうな用具を子どもたちが進んで

探したりしたことで、プラスチックの円柱を火に見立てて、網の上で焼いて料理をすることができた。

- ・友達や保育者に進んで話しかけたり、自分の思いを少しずつ伝えたりすることを楽しめるようになってきているので、今後も友達との関わりを持つことを楽しめるよう援助していくようにする。

【事例3】「次は勝つ！」 5歳児 6月

○いろいろな素材の特性に気付き、工夫して取り組む。

○友達と考えを出し合い、共通の目的をもって遊びをすすめる。

とる船2個に水を溜めておく。空のタライを2個置く。水運び用の素材(牛乳パック、ペットボトル、卵パック)を用意しておく。グッパでチーム分けをする。

(A~C、D~Gがそれぞれ同じチームになる)1回目は牛乳パックで水運び競争をする。走って水運び競争をして、B児達のチームが勝つ。別チームのD、E児達は「次は、勝つ」と悔しがる。2回目は、底の部分を取り取り、飲み口の下に数か所目打ちで穴を開けたペットボトルを用意する。保育者が水を入れたペットボトルを胸の高さまで持ち上げ、子ども達に見せる。「穴が開いてるやん」「面白そう」とペットボトルの様子を見ている。D児とE児が「穴のどこ手で持ったらいいやん」「そうしたら、水こぼれへんな」と水を沢山運べる方法を自分たちなりに考える。G児は「これやったら、もっとこぼれないかも」とペットボトルを抱きかかえるようにして運ぶ。保育者「G君は新しい持ち方考えたんだね」と声をかける。G児の姿に気付いたD、E児が「G君それ面白いな」とG児のようにして運ぶ。試してみたD児は「これ、めっちゃこぼれるやん。僕は手の方がいいと思う」と手で穴をふさい方で運ぶ法を選ぶことを決めた。G児は抱きかかえて運ぶ方法を取りながら、「もうちょっと、ゆっくり行こう」と早歩きになる。G児「さっきより、こぼれなかったよ」とE児に伝える。

(評価・反省)

- ・子ども達の中に「競争に勝ちたい」と共通の目的がはっきりしていたことで勝つためにはどうしたらいいのかを、それぞれのチーム内で意見を出し合い、力を合わせて、意欲的に取り組む姿につながった。
- ・一見非効率に見える方法でも、それも一つの方法として認めることで、「走ると水がこぼれる」⇒「早歩きをしたら、こぼれにくいかもしれない」という新しい発想につながった。

【事例4】「くやし涙が教えてくれたこと」 5歳児 11~12月

○遊びや活動の中で自分なりに課題をもち、意欲的に活動に取り組む。

○友達と共通の目的をもって協力しながら遊びを進めていく。

クラス全員でドッチボールをする。A児がしきりに目元をこすったり、手をふるわせたりしている。保育者「どうしたの」と声をかける。A児「勝てなくて、悔しかった」と言う。B児「何回もやったら、いいんだよ」C児「初めは勝てなかったけど、何回もやったら勝てるようになったよ」D児「Bちゃんも、私もいつもしているから、勝てたんだよ。だから毎日してるんだよ」と自分が勝つたために行っていることを伝える。翌日、ドッチボールに参加していたA児「今日は僕、2回も勝てたよ」と笑顔で、友達や保育者に伝える姿がある。

(評価・反省)

- ・友達の遊びに興味はあるが、自分から輪の中に入れない姿があった。

共通経験として、ドッチボールを行う事で、初めてドッチボールの楽しさに触れることができた。

- ・楽しいからこそ、勝ちたいという気持ちが芽生え、自分のチームが負けたことの悔しさを感じる事ができた。
- ・気持ちが大きく動いたことで、「ドッチボールに勝ちたい」という目標に向い、自分から遊びの中に入っていけるようになり、経験を積み重ねる事で自分から遊びを発信する力につながった。

## 5. 研究の成果

- 入園当初の子どもは、人や遊びへの関わり方に個人差が大きい。一人一人の様子に合わせて、保育者が寄り添うことや、見通しを持った援助や環境構成をしておくことで、子ども同士の関わりが生まれるきっかけを作ることが必要であると感じた。また、その時の子どもの様子に応じて、全て保育者が準備するのではなく、子どもと共に創っていく大切さを感じた。
- 4歳児後半になると、友達同士の関わりも強くなり、互いに関わりあって遊ぶ姿が多くなるが、保育者との関りで安心感や自信を持つことで、さらに友達にも心を向けることができる時期でもあるので、保育者は子ども同士の関わりを見守りながらも、必要に応じて、丁寧な関わりを大切にしなければならない時期だと分かった。
- 5歳児になると、「小さな困難」や「少し先の目標」に出会うことで、「どうすればいいか」とやり方や仕組みを考える原動力となることが分かった。また、保育者だけではなく、友達から認められることで、自己肯定感が高まり、より主体的な姿につながる事が分かった。

## 6. 今後の課題

子どもが主体的に活動し、いきいきと遊びこむ為には、発達段階や個人差を理解した保育者の援助と、試したり探求したりすることができる環境構成が必要である。子どもを見つめ、子ども理解に努め、保育の記録を工夫し、保育を振り返ることを大切にしていきたい。